

Title	DMCシンポジウム2024「知と情報と人間：デジタル知の深化と共有に向けて」
Sub Title	
Author	岡田, 英史(Okada, Eiji) 金子, 晋丈(Kaneko, Kunitake)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.12, No.1 (2025. 3) ,p.4- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム：DMCシンポジウム2024記録 「知と情報と人間：デジタル知の深化と共有に向けて」 開催日時：2025年3月17日 (月) 14:00～17:00 開催場所：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000012-0004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シンポジウム

DMC シンポジウム 2024

「知と情報と人間：デジタル知の深化と共有に向けて」

日時：2025 年 3 月 17 日（月）14:00-17:00

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎 シンポジウムスペース

シンポジウム概要

社会のデジタル化とともに、情報や知の共有に関するシステムは印刷技術以来の大きな変革期を迎えている。20 年前までは、目新しいデジタル技術がもたらす社会変化の可能性を探ることが重要であったが、デジタル技術の社会浸透に伴い、本技術がもたらす経済的・社会的インパクト、社会における情報共有のあるべき姿、そして、根底にある人間と情報や知との関係性を改めて問い直す必要がある。

本シンポジウムではそれらの問いに対し、情報の分類・探索・蓄積・インタラクションといった視点に、書物史、科学史等の大局的な視座も加えて、これからの人と社会の変化を見据え、情報・知の共有のあり方と可能性に関して議論を行う。



慶應義塾大学DMC研究センター
シンポジウム第13回

デジタル知の深化と共有に向けて

知
と
情
報
と
人
間

■日 時：2025年3月17日（月）
14:00～17:00（13:30開場）

■場 所：慶應義塾日吉キャンパス 来往舎シンポジウムスペース

■開催形式：対面・オンライン配信

■入 場 料：無 料

※申し込みフォームによる事前登録をお願いします

DMC
Digital Media Center

主催 慶應義塾大学デジタルメディアコンテンツ総合研究センター
<https://www.dmc.keio.ac.jp/index.html>
お問い合わせ：TEL 045-548-5807 / Mail jimu-dmc@adst.keio.ac.jp

DMC 研究センターでは、これまでにデジタルアーカイブの構築や FutureLearn オンラインコースのコンテンツ制作を通して、歴史資料や文化資源のデジタル化に取り組んできました。昨今では研究のデジタルデータや成果だけではなく、そのプロセスをも含めて社会に広くオープンにすることが期待されています。本シンポジウムでは、オープンサイエンス時代におけるデジタル知の共有と公開について、歴史資料や文化資源などの分野も視野に入れて検討します。皆さまぜひ奮ってご参加ください。

プログラム概要

講 演 (14:10～15:30)

橋詰秋子 書誌コントロール： 図書館における知の共有の仕組み	
木村麻衣子 図書館情報学とDHの関係について、 Digital紅葉山文庫での経験から考えたこと	
池田真弓 ヨーロッパ中世から近世における 知の所有と共有について ―薬草事典を例に	
荒金直人 客観性・明証性・連続性 ―私たちは情報に何を求めているのか	

パネルディスカッション (15:45～16:45)

●パネリスト (50 分18)

荒金直人 池田真弓 木村麻衣子 橋詰秋子

●モデレーター

金子晋丈



ご挨拶

岡田 英史

(常任理事、慶應義塾大学理工学部教授)

ただいまご紹介いただきました担当常任理事の岡田でございます。今日はデジタルメディア・コンテンツ統合研究センターシンポジウムにご来場いただきまして、誠にありがとうございます。

本日のテーマは「知と情報と人間」ということで、実は昨日、慶應の三田キャンパスで、歴史学者で哲学者のユヴァル・ノア・ハラリ教授が講演をされました。その中で、いわゆる真実と情報という話が出てきて、**「真実というのは情報の中にほんの数パーセントしかないんだ、情報はほとんどジャンクだ」**というようなことを言われておりました。

ただ、昔からデマであるとか偽情報、いわゆる資料で言えば贋作的なものはたくさんあったはずなのですが、それがいろいろと拡散する、特にアルゴリズムによって自動的に拡散するような仕組みができてしまった、ということが、今の非常に危機的な状態を生んでしまったわけです。知も情報も最終的に扱うのは人間ですので、特にデジタルメディアというものができて非常に便利になった半面、さまざまな問題も指摘されている中で、このデジタルメディ

ア・コンテンツ統合研究センターが、今回のシンポジウムのテーマとしたのが、「知と情報と人間」です。知と情報も扱うのは人間なわけですから、人間がどんどん考えていかなければいけない。それを、私なども理工学部の出身なので、どうしても便利ならいいじゃないかと思ってしまうところもあるのですが、そうではなくて、やはり作ったものが社会にどういうインパクトを与えるのか、そういうこともしっかりと考えなければいけない。そして、そういう人材を理工系であっても教育していかなければいけないわけです。重要なのは、「知と情報と人間」をしっかりと結び付けるということで、こういう本当にタイムリーなテーマを、デジタルメディア・コンテンツ統合研究センターの皆さんが選んでくださったなと思っております。

私自身も理系出身なものですから、今日是一緒に勉強させていただこうと思っていますので、半日の短い時間でございますけれども、どうかよろしくお願いいたします。

シンポジウム趣旨説明

金子 晋丈

(DMC 研究センター副所長、慶應義塾
大学理工学部准教授)

こんにちは。DMC シンポジウムにお越しいただきましてありがとうございます。金子と申します。実は私の専門は IT 系ですが、今日この後ご講演いただく先生方は、IT 系ではありません。デジタルメディア・コンテンツ統合研究センターというところは、名のとおり、今どきデジタルとか使っている時点で、古いのではないかと思われるかもしれませんが、これから大きく技術的にデジタル中心の、バックエンドでデジタルが大きく使われる世の中が変わっていく中で、どういったことを我々は真面目に向き合って考えなければならないのかということで、これまでシンポジウムを開催してまいりました。

ここ数年、向き合っているトピックが情報の流通です。先ほど情報のほとんどはジャンクだというお話がありましたが、ジャンクというものもきちんと使われるべきところにそのジャンク品があれば、それは有用なものに変わるわけでございまして、その役割をいろいろな形で担ってきたのが、いわゆる情報の流通とか知の流通と呼ばれているエリアだと思っています。

特に図書館というメカニズムはですね、これまでもう何百年とその役割を担ってきたわけですがけれども、実際のところ、本の流通量も減ってまいりましたし、本

でベストセラーと言ったら数万冊レベルがその領域だったと思うのですが、例えば YouTube を介した情報の取得になってくると、普通に数十万ビュー、数百万ビュー、数千万ビューというレベルで、無料で、アクセスできるものになっていると思います。我々の周りで、もう絶対 YouTube 見ません、情報の取得は本だけにしますという人も聞いたことはないですし、逆に本は絶対読みませんと言い切っている人も聞いたことがありません。

特に今の YouTube を中心とした、もしくは SNS を中心とした、ウェブを中心とした情報の発信は、どちらかというところに行き行って検索して、情報が見つかって、しかし本当に欲しいものかどうか分からないまま見るというのをいろいろトライしなければなりません。その対極にあるのが図書館で、図書館に行ったら司書の方がいらっしゃって、こんなこと知りたいと言ったら、「ここのコーナーに多分ありますよ、こんな本いかがですかね」というようなことまでしてくれます。全く異なりますよね。もちろん扱ってるものが本とデジタルメディアという違いもあって、ともすればこう、対立軸の 2 つ、どっちがどっちになるんだといった、ゼロイチのたたかいのような、そんな様相が出てくる時があると思うのです。しかしそもそも我々はどういうふうに情報を欲しいのだろうか、どんな情報が欲しいのだろうか。何ならこのシンポジウム、チラシにも初回からずっと「デジタル知の進化と共有に向けて」と書いてありますが、最初に言われました、「デジタル知って何ですか？」という問いに立ち戻りたいと思います。今でも私は、デジタ

ル知というものが何なのかわかりません。しかし、それでは果たして知の殿堂のように言われる図書館が本当の知なのか、知とはいったい何なのかとか、そういったところをあらためて考えてみるというのも、この機会にやってみなければならぬことかなと考えております。

すなわち、今 DMC で向かおうとしている先というのは、今後 DX というものが情報の流通、知の共有といったところに正面から向き合っていかなければならないのではないかと考えています。そこを適当に流してしまっただけで、何も自分たちは考えないまま、経済的合理性なりなんなりで流されていく、技術の動向で流されていく。こういうことではなくて、我々は本質的にどういうふうな知なり情報へのアクセス、もしくはそのサービスをどういうふうに社会の中で提供していくのか、そういったところを、一から考えていくきっかけを作りたいと思って、このシンポジウムを開催しております。

私の話はこの辺にして、皆様には、もっと具体的な話とかを考えていただきたいなと思っております。私はここで決して、こんなストーリーで今日進めますということを言うつもりもありませんし、それは皆様一人ひとりがぜひ考えていただきたいことだと思っております。

ですから、冒頭でこのような形の内容を発表していただきます、などと申し上げるのが筋なのかもしれませんが、一人ひとりが違う価値観でその辺りを考えていただければいいなと思っております。登壇いただくのは 4 名の方です。先程この 4 名の方とお昼をいただきながら、お話ししましたが、「IT は全然プロフェッ

ショナルじゃありません」と皆さんおっしゃっていました。IT 系なのは私だけで、4 名の方は違うバックグラウンドをお持ちです。違うバックグラウンド、それぞれの観点から、今先程申し上げました内容について、どういうふうなことを考えていらっしゃるのか、自分の身近なところではどういうふうなトレンドになっているのか、そういったところを経験に基づきながらお話しいただく、そのようなシンポジウムになっておりますので、ぜひお楽しみいただきたいと考えております。以上で趣旨の説明とさせていただきます。